

「まぼろしの男 田中吉政」

近江三川村（現在の滋賀県）生まれ。関白秀次の筆頭家老として近江八幡の水郷を造り、徳川家康父祖伝来の岡崎、西尾の城を預かり、矢作川開削、東海道の築き直して岡崎を東海随一の宿場として繁栄させた田中吉政。今も近江八幡は水郷の町として知られ、岡崎の旧東海道は観光27曲がりと呼ばれている。

後に関が原で石田三成を捕縛した功により、初代筑後国主として32万5000石の大大名となった田中吉政。当時の筑後国は福岡県南部全ての広大な地域を指す。北の黒田、南の田中と云われ、当時の福岡県は、筑前黒田家と筑後田中家によって治められていた。柳川に残る水郷と堀は、田中吉政が築いたものである。花宗川が吉政によって開削された運河であることを知る人は少ない。県道23号線として残る道は、柳川から久留米への新街道であった。これも吉政の仕事であり、街道筋に移民開拓者として入った者には「永代年貢免除」（永代無課税）と言う破格の施政が行われた。

32キロに及ぶ汐留防波堤「慶長本土居」を3日で完遂したこともほとんど知られていない。吉政が土木工事の神様と呼ばれた所以である。土木だけではない。ランドデザインとしての街区の構成はもとより、商業、職人町の形成による経済振興、道路整備、河川工事、運河開削などによる流通運搬の構想も怠りなく行われている。

現在の柳川、久留米、八女など筑後国と呼ばれた地域の産業や特産品の殆どが、田中吉政によって発掘調査され産業の基盤となる萌芽を見せている。例えば和紙の発展の基礎、八女茶、檀蠟などもそうだ。まだ地元に残る土師司蒲池窯を筆頭に、鋳物師司の平井、下坂鍛冶など挙げれば枚挙にいとまがない。これらの人々が現代に至る筑後国に与えた影響は計り知れないと言えるだろう。

信長、秀吉、家康と戦国終盤激動の時代を共に生きてきた田中吉政は、3人の英傑から国造り町作り土木工事だけでなく、経済流通はもとより行政施策の政治までを学び、且つ吸収した稀有の男だったのだ。

20年と言う親子2代の治世の後、筑後は久留米藩と柳川藩に二分され田中吉政の残したものは消し去られてしまった。だが今、久留米の有馬、柳川の立花だけでなく、最初で最後の筑後国主であった「まぼろしの男、田中吉政」の姿を検証して良い頃ではないかと思う。